改めて酔いしれる、モーツァルトの真髄

ザルツブルク「モーツァルト+フェスト」2022

「モーツァルトにもっとスペースを!」と謳われ続けて100年以上、ようやく増改築されたザルツブルク・モーツァルテウムは、政府関係者に合わせて10月19日にこけら落とし、20〜23日に「モーツァルト+フェスト」として公開された。芸術監督のロランド・ビリャソンは生憎新型コロナに罹患したため、オープニング・コンサート《羊飼いの王様》のアレッサンドロ役をマーク・ミルホファーが務め、以前彼が同役を同様にキャンセルした際に、ビリャソンが代わったお返しを立派に果たした。クリスティーナ・ブルハーが創設、指揮するアンサンブル「ラルペッジャータ」の活気ある音楽、アミンタ役のエモーク・バラート、アジェーノレ役のザカリー・ワイルダー、エリーザ役のエレーナ・サンチョ・ペレ、タミーリ役のタマーラ・イヴァニス全員が健闘したが、オープニング公演としては小粒な印象を否めない。

翌21日は南米の音楽教育に貢献するメデジン・イベラカデミーのオーケストラ管弦楽団が、創設者のアレハンドロ・ポサダの指揮で「3つのディヴェルティメント」と《音楽の冗談》、そしてコロンビア音楽を奏でて客席を湧かせた。夜はレイフ・オヴェ・アンスネスが「ピアノ協奏曲第22番」と「同第24番」を弾き振りし、2曲の間に置いた「交響曲第38番《プラハ》」でも、マーラー・チェンバー・オーケストラを巧みに指揮して好相性を見せた。

22日はアンネ=ゾフィー・ムターが自身の財団奨学生たちと共演。「弦楽四重奏曲第2番」と「弦楽五重奏曲第6番」の間にハイドン「弦楽四重奏曲第31番」を挟み、巨匠の音色と若いパワーの相乗効果は貴重な体験となった。夜はヨーロッパ室内管弦楽団がフランソワ・ルルーの喜び溢れるような指揮で「交響曲第28番」と「同第40番」を演奏、その間にリサ・バティアシュヴィリ(vn)をソリストに迎えた「ヴァイオリン協奏曲第5番《トルコ風》」と、ルルーの弾き振りによるベッリーニ「オーボエ協奏曲」を挟むという意欲的なプログラム。以前より深くなったバティアシュヴィリの運命的ですらある音に満たされた後、アンコールを前に彼女がウクライナで射殺された指揮者ユーリ・ケルバテンコのことなどウクライナの悲劇について語り、《魔笛》のパミーナのアリアをルルーのオーボエと二重奏して感涙を誘った。

23日はウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のメンバーがベートーヴェン「七重奏曲」とモーツァルト「クラリネット五重奏曲」を。ライナー・ホーネック(vn)の匠と、寄り添う若手が到達した究極の美に幸福感を覚えた。

取材・文=中 東生

豪華な出演者たちによって彩られた「モーツァルト+フェスト」。弦楽四重奏を披露したムター(左)と第2ヴァイオリンを務めたイェウン・チェ ©中 東生

バティアシヴィリ(左)とルルーの夫婦共演も ©Wolfgang Lienbacher